台密教理と実相論

木内堯央

われわれはさいわいに、天台教学との関連の有無の結果としての、台密の教学と空海の教学とを比較しうる立場にある。

天台教学や天台の観行の面に、中観派の教理論、修道論が基礎をなすといわれ、密教教学とその実修的側面に瑜伽行派の考え方や修道論が底流になっているという指摘もされる。[3] とすれば、台密の教学は、仏教教理史的にも特異な存在であるといわなければならない。

一

天台大師智顗にはじまる天台教学が、実相論を基調としていることは、周知の事実である。[1]

台密とは、天台密教のことであり、日本における伝教大師最澄以来、天台宗に加わった密教のひとつの流れである。日本の天台宗が、智顗以来の天台教学を基盤としながら、著しい展開をみせたのは、この密教の受容によるところであることも、大方に認められる。[2]

天台教学と密教との交わりは、仏教史上画期的なことであるが、最澄において具体的に立てられた両教一致の教理は、円仁、円珍、安然らに拡充されて、台密教理論として体系化される。

興味深いことは、同じ時代に、弘法大師空海が密教を専一に伝えて、独自の構相力をもって、密教至上の教理論を展開し、その教学を体系化していることである。

二

最澄は、入唐して天台教学と併せて密教を伝え、延暦二十五年天台業二人の年分度者が認められるについて、一人には『摩訶止観』を読ましめ、一人には『大毘盧遮那経』を読ましめるとした。すなわち密教は天台教学と対等に位置づけられた。[4] 最澄は、「但だ遮那の宗と天台と融通す」[5]「法華金光明は先帝の御願、亦た一乗の旨、真言と異ること無し」[6]「法華一乗と真言一乗と何ぞ優劣あらむ」[7] 等といい、『観普賢経』

により釈迦・大日の一体をいい[8]、『法華経』も果分の法であり内証の本法である[9]等として、いわめる円密一致の説を高揚したのであった。

つづく円仁は、空海が有相三摩地の説不をもって立てた顕密二教判[10]に対して、最澄に発する三乗一乗相対の顕密判を設け、『法華経』を密教に分類して、『大日経』等と一致せしめた[11]。

『金剛頂経疏』巻一に、経体を明して阿字門なりといい、阿字の不生・有・空三義を釈し、「不生とは、即ち是れ一実境界、即ち是れ中道なる故に、竜樹云く、因縁生法、亦空亦仮亦中[12]」としたり、『法華経』に「是法住法位」というのは、秘密の理を顕説したものであるなどというのは、密教の理を諸法実相の理とおさえることで、天台教学に立った円密一致説が教理論に及んだのである。

仏の十号を釈して、修伽陀を好説と訳し、「好説とは諸法実相の如きの説なり」としたり[14]、毘盧遮那の三業を歎じて無始無終なりといい、『大日経義釈』を用いて、「然るに大日世尊は、是れ一切諸法の本初にして、一切世間の所依なり。常恒に説法し、常恒に寂然なり。是くの如く皆ことごとく法然の道理にして、世情の推度に非ず。三際の所摂に非ず。いわゆる不思議なる者なり」とする[15]のは、仏説、仏身の上に実相論を及ぼしたものといえる。

円珍は、円仁とは別に入唐し、台密の充実に寄与したわけであるが、その著『大毘盧遮那経指帰』には、「是に於て、唐朝老宿、醍醐を生蘇に貶し、本国幼童、甘露を毒乳に濫ず[16]」と、密教を天台所立五時第三時に置く広修・維鑠ら唐国天台宗の所判を批判し、天台を第八住心に判ずる空海の考え方に対抗して、台密の宣揚に努力している。

同書に、大日如来の名義を釈しては、「無明煩悩戯論の重雲のために覆障せらるるといえども、しかも滅ずるところ無し、諸法実相三昧を究竟し、円明際り無く増すところ無し」といい[17]、「三昧耶」とは等の義であるとして、阿闍梨、弟子、仏、十方三世一切如来、一切諸菩薩、一切声聞縁覚、一切世間の天仙にともに等しといい、これ毘盧遮那仏身にして、諸世間等と同順なりとし、「亦た是れ法華の皆実相と違背せずの義なり」という[18]。

ないし、『大日経』『義釈』の「横統一切教」の下を引いて、「彼に諸法実相と言うは、即ち是れ此の経の心実相なり[19]」「漸次に心実相門を開くというは、即ち是れ法華一乗、四十余年未顕真実なり。故に彼に諸法実相と言うの句は、則ち法華方便品を指すなり。此れを除いての外に唯の一教も無し[20]」という。

円密一致の宗是のもとに、大日如来、『大日経』の教理、経体に、実相論に立つ説明を行い、天台所立五時に、初中後

をわけて、『大日経』等密教を後分に配しているのである。[21]

安然の場合は、浩瀚精緻な論考が多いが、例えば『菩提心義抄』巻一、釈名の下に、勝義三摩地の名義を釈して、勝義空に立ち菩提を求むる心を菩提心なりとし、菩提とは如実知自心であるとして、『大日経義釈』の頓覚成仏、入心実相門の項を引き、「一切経中のごときは、皆是れ漸次に実相門を開く、彼に諸法実相と言うは、即ち是れ此の経の心実相なり」と徴するのである。[22] つづいて、「因縁所生法は亦空亦仮亦中なり。故に知んぬ、真言菩提心の実相も亦た、即空即仮即中なり」[23]と引いている。

結局、不可得空にことよせて、「天台宗の若きは、中論に因縁所生法を我れ即ち是れ空と説く、亦た名づけて仮名と為す、亦た是れ中道義なりというに依り、一切諸法、即空即仮即中を一心空と名づく。今、真言救世者不可得空は、前の九空（他宗の空義）に非ず。唯だ天台と同じ」[24]というのである。

三

以上きわめて恣意に台密列祖の所論を抜き出したが、共通するところは、いずれも宗祖最澄のテーゼである円密一致を踏みはずすことなく、その教理的体系づけに苦心しているところである。さらに、いちおうの列挙ではあったけれども、円仁、円珍、安然のいずれの場合にあっても、この主要な実相論的教理論の淵源を、かの『大日経義釈』に求めていることにも注意したい。

『大日経義釈』十四巻は、その温古序によれば、[25]『大日経』翻訳時に善無畏と協力した一行が、経意を随時審問し記録したところに祖型があり、東密家所用の空海将来『大日経疏』二十巻も、たがいに異本同志にすぎないのである。そればかりでなく、目下の問題として重要なことは、一行が玉泉系の天台学を修めた人師であるということである。[26]

かくして、教理教判論ばかりでなく、観行修道の体系においてすら、『大日経』疏釈が天台義の影響、体系を基いとしていることも近来強く指摘されるところである。[27]

さて、こうしてみると、日本天台における密教、すなわち台密の教理論に、天台実相論が適用されるについては、もちろん、最澄にはじまり、天台法華教学が並行していることによることはいうまでもないが、上来の引用に明らかなように、『大日経義釈』からの直接的、具体的取り入れが、もっとも強力であったといわなければならない。

『大日経義釈』巻一の、「経云秘密主云何知自心」の下は、先に説く浄菩提心如実相を了得していない衆生のために、「此の頓覚成仏入心実相門を説く」のだという。

「一切経中に、或は諸蘊和合中、我不可得と説き、或は、諸法は縁従り生ず都て自性無しと説くがごときは、皆是れ漸

次に実相門を開くなり。彼に諸法実相と言うは、即ち是れ此の経の心の実相なり」[28]

「又復た衆縁従り生ずる故に即空即仮即中なり。一切の戯論を遠離し、本不生際に至る。本不生際とは即ち是れ自性清浄心なり。自性清浄心は即ち是れ阿字門なり。心阿字門に入るを以ての故に、当に知るべし、一切法悉く阿字門に入るなり。已に諸法実相を観ずるを説く」

などは、この一節の所論であり、台密教理の阿字体大説などの根拠になる。

もっとも、前の徴文の、「漸次に実相門を開く」については、安然が『菩提心義抄』巻一で、「今の心実相とは、是れ法華の実相なり。法華の実相は本是れ頓法なり。然るに五時を歴て最後に開顕す。故に漸次と判ず。漸法と謂うには非ず」といっている。

ところで、空海は、『秘蔵宝鑰』巻下、十住心のうち第八一道無為心の下に、右部分の『大日経』を引証とし、『経』に、「秘密主、この菩薩の浄菩提心門を初法明道と名づく」とあるところから、「釈していわく、いわく無相・虚空相および非青・非黄等の言は、ならびにこれ法身真如一道無為の真理を明す。仏これを説いて初法明道と名づけたまう。『智度』には入仏道の初門と名づく。仏道というは、金剛界宮大日曼荼羅の仏を指す。もろもろの顕教においてはこれ究竟の理智法身なれども、真言門に望むれば、これすなわち初門なり」[31]というのである。台密が、この所判を受けいれていないことは、前に引いたとおりで、所顕の理は『法華経』諸法実相と等同とみて、ただ「初法明道」については、行位のうえで凡聖、住上住下いずれの段階かは多岐に論義される。[33] おなじく『大日経』疏釈を用いて、台密が円密一致の教理づけに専らであることは、右のサンプルに歴然たるものがある。

1、石津照璽『天台実相論の研究』、新田雅章『天台実相論の研究』。 2、島地大等『天台教学史』二三五頁。 3、長沢実導『瑜伽行思想と密教の研究』三二九頁。 4、新伝全一―七。5、伝全五―四四七。 6、同上。 7、伝全五―四六九。 8、伝全一―二〇一。 9、伝全三―四六。 10、『弁顕密二教論』弘全一―四九一。 11、仏全四三―二五四。 12、仏全四三―二一。 13、仏全四三―四。 14、仏全四三―三七。 15、仏全四三―五〇。 16、智全中―六五六。 17、智全中―六五七。 18、智全中―六六九。 19、20、智全中―六七三。 21、智全中―六七二。 22、大正七五―四五九c。 23、大正七五―四六〇a。24、大正七五―四六一b。 25、続蔵三六―二五四右。 26、長部和雄『一行禅師の研究』、関口真大「玉泉天台について」天台学報創刊号。27、三崎良周「大日経義釈と天台義」早大大学院文学研究科紀要二七、村中祐生『大日経義釈』にみる観行」勝又博士記念論集。28、続蔵三六―二六六左。 29、同―二六七右。30、大正七五―四五九c。 31、弘全一―四五八。 32、『義釈捜決抄』一之六、天全一〇―三七二、福田堯頴『続天台学概論』二〇四頁。

（大正大学助教授）